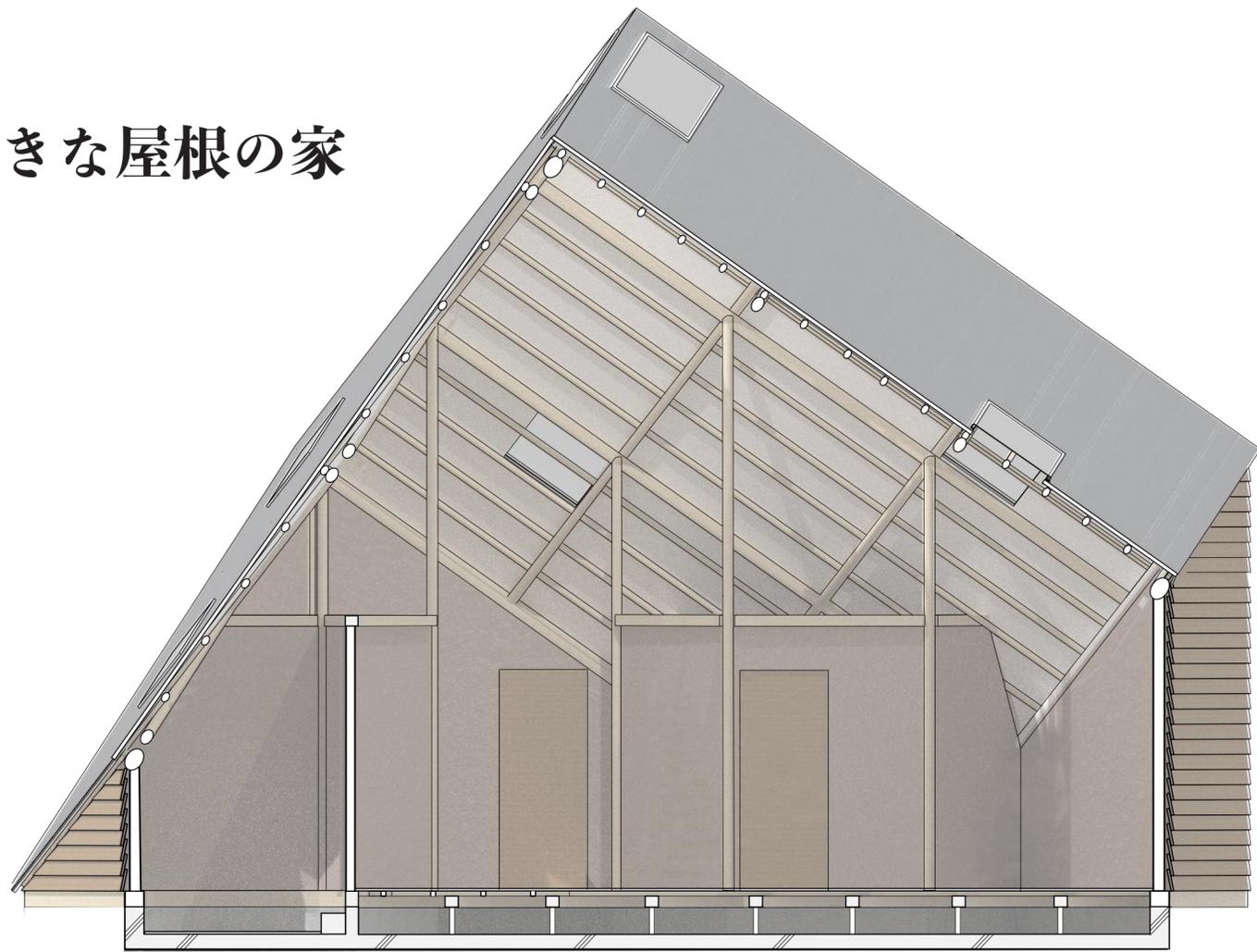


大きな屋根の家



日本の木造建築の特徴の一つとして屋根組の美しさがある。屋根組の美しさを最大限に利用して空間を作ることができれば北山杉の特徴（化粧材にも構造材にもなる / 末落ちが少ない / まっすぐな長い材が得られること）を最大限に活用することにもつながるのではないかと考えた。

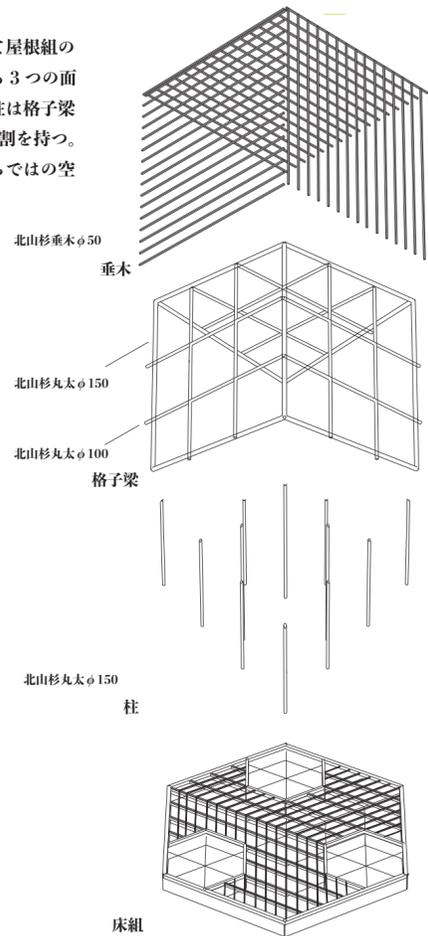
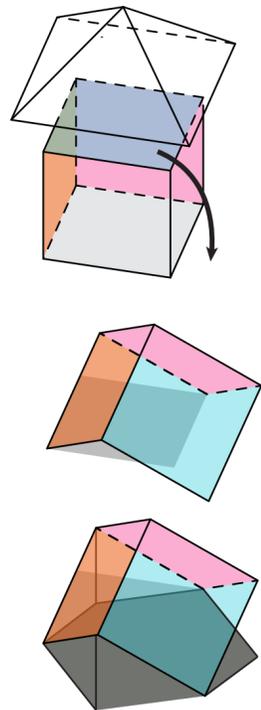
敷地



敷地は大徳寺と船岡山の近くの材木店跡地。昔、中川から人力によって北山杉は運ばれていた時代に流通の拠点であった北大路通りの近く。現在も老舗の工務店などが近くに存在する。一方で、京都市内中心部とは異なり江戸時代は大徳寺の付近を除いて田畑が広がるなど使われ方の変遷が大きく、現在は昭和期の建築物の老朽化に伴いところどころに空地が存在している。

ダイアグラム

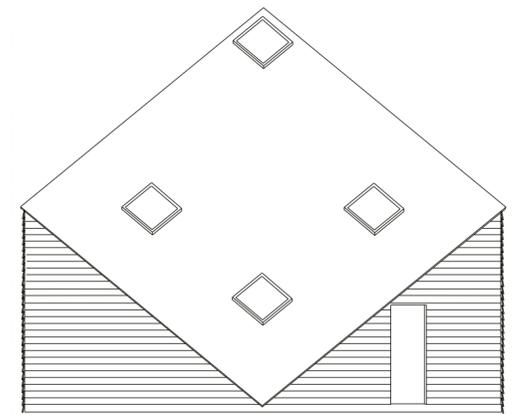
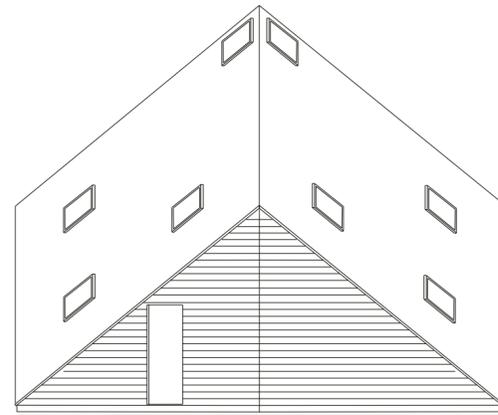
従来の木造建築では屋根組と柱梁の下部空間は別れていて屋根組の美しさが体感しづらい。そこで格子梁によって構成される3つの面を互いに持たせかけることで屋根組だけで空間を作る。柱は格子梁が作る面のたわみを防ぐだけでなく、意匠的にも大きな役割を持つ。構造材としても意匠材としても高い品質を持つ北山杉ならではの空間になる。



地面からそのまま屋根が立ち上がることで大きな気積を生む。大きな屋根によって上方に大きな気積を持つという点において、この地域に僅かに残る織屋立てとの共通性もある。結果として単なる保存や再生とは異なった再解釈による地域の建築の空間性の継承となるのではないかと考えている。

内観パース

間仕切り壁は屋根面よりも下で止めることで全体としては大きな1室空間として屋根からの採光を共有するようにする



立面図 S=1:100

立方体のボリュームを回転させて生まれる六角形の平面は元の立方体の平面と比べるとより中心性が高まると考えた。そこで敢えて敷地の中心に建物を配置し裏と表を作らずどこからでも家にアプローチできるようにした。

平面図 S=1:100

